

第2回 Step!

# 展開例から発問、問い返しを考える



横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校 根本 哲弥

## 1. Hop (第1回) とのつながり

3回にわたり掲載される『道徳教師用指導書 活用術!』。第1回では、さまざまな内容項目の関連を考えながら教材を読むことで、ねらいが明確になり、子どもの発言を生かした授業につながることを考えていきました。第2回では、明確にしたねらいに向かって授業を進めるうえで核となる「発問、問い返し」について、展開例をもとにしながら考えていきたいと思います。

## 2. 発問、どう考えればいいのか?

内容項目の関連を考えながら教材を読み、授業のねらいを明確にすることは、いわば授業の「もと」づくり。でも、その「もと(ねらい)」に向かう発問は、どのように考えればいいのか?という悩みが生まれるのではないのでしょうか。そこで、まずは指導書に書かれているねらいと展開例の発問を参考に考えてみましょう。

### 1年 「ぼくは いかない」

#### ねらい

何がよいことで何が悪いことがわかり、よいことをしたいと思う心に動かされ、進んでよいことを行おうとする。

#### 発問

しんちゃんはどうして「よわむしではない」と言えたのでしょうか。

### 4年 「お母さんのせいきゅう書」

#### ねらい

父母や祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくらうとする。

#### 発問

お母さんの心を知る前と後で、ブラッドレーの考えはどう変わったのでしょうか。

### 5年 「心の管理人」

#### ねらい

自由を大切にし、自律的に判断して、規律ある行動をとらうとする。

#### 発問

「この場所の管理人はあなたです」とは、どのような意味でしょうか。

低・中・高学年から教材をあげましたが、それぞれに共通していることは、示されている発問がねらいに直結していることです。この発問をすると、子どもたちの発言が自ずとねらいに向かうことが予想できます。一方、発問の種類から考えると、それぞれに違いがあることがわかります。

低学年は「なぜ、どうして」と理由を問う発問からねらいに向かっていくこと。

中学年は「前と後」。つまり、前と後を比較して変容を問う発問からねらいに向かっていくこと。

高学年は「どのような」と想像させる発問からねらいに向かっていくこと。

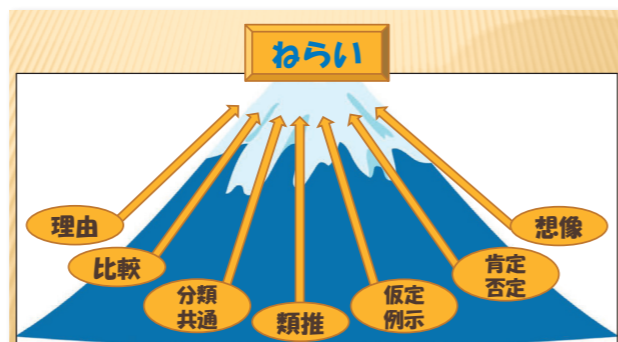
これらのことから、発問づくりのポイントを整理すると、以下のようにまとめることができます。

#### 1 発問はねらいに向かっているか

「子どもたちに問いができ、活発に話し合うだろうからこの発問をしてみよう」という考えでは、せっかく内容項目の関連を考えて教材を読み、明確なねらいを立てた意味がありませんよね。ですから、考えた発問がどのような反応を期待した発問なのか、その反応がねらいに向かっているかどうかを吟味することが大切です。

#### 2 発問の種類にはどのようなものがあるか

発問づくりでは、ねらいに向かっているかに加えて、発問の種類を考えることも大切です。1年「はしのうえのおおかみ」を例にしながら発問の種類を考えてみましょう。



- ①理由…「なぜ、どうして」を問うて考えを深める  
どうしておわりのおおかみは、うさぎをそっと後ろへおろしてやったのでしょうか?
- ②比較…はじめとおわり、登場人物同士などの違いを問う  
はじめのおおかみとおわりのおおかみは、両方とも「よい気持ち」になっていますが、何か違いはありますか?
- ③分類・共通…観点を設けて、相違点や共通点を問う  
おわりのおおかみとくまの同じところはどこでしょう?
- ④類推…似ている点を基にして、他のことを推し量る  
はじめのおおかみの「よい気持ち」を5とすると、おわりのおおかみの「よい気持ち」はどれくらいでしょう?

- ⑤仮定・例示…仮の場を設定させて考えを拡充する  
もしも抱えられないゾウさんが来たらどうでしょう?
- ⑥肯定・否定…よいこと(悪いこと)をあえて否定的(肯定的)に問う  
おわりのおおかみは、くまに怒られるのが嫌だから、うさぎをそっと後ろにやったのでしょうか?
- ⑦想像…教材に描かれていないよさを広げ深める  
おおかみはくまの後ろ姿を見ながらどんなことを考えていたのでしょうか?  
主に7つの種類を紹介しましたが、これらを組み合わせたり、子どもの反応に応じて問うタイミングを図ったりしながら授業を展開できるとよいと思います。

## 3. さらに深める問い返しを目指して

発問は事前に考えることができますが、問い返しは目の前の子どもたちの反応を受けて瞬時に返すもの、まさにライブです。さらに深める問い返しのポイントを3つに整理し、実践例から紹介したいと思います。

- ① 子どもの発言の真意を考える
- ② 発言の真意がねらいに向かうかどうかを判断する
- ③ ねらいに向かってさらに深まる問い返しを放つ

### 5年 「帰ってきた、はやぶさ」(光文書院)

#### 導入 誰もが解けない謎を解くためには?

C: これまでの研究を生かす… 言質をとっておく

#### 展開 真理を探究し続けたい心に触れた後の展開

T: これまでの研究を生かすのであれば、イオンエンジンではなく化学エンジンを使い続けた方がよいのでは?

C: 簡単で真似しないことが大切。

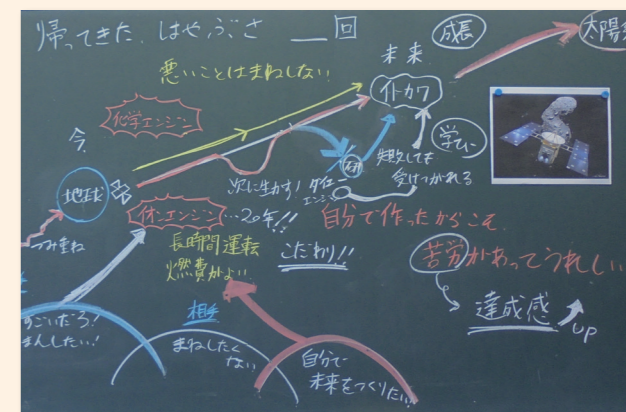
C: イオンエンジンのよさに注目して研究を続けた。

C: 研究する苦労もうれくなる。

T: 苦労はない方がうれしいよね。楽しんでゴールした方がうれしいのでは?

C: 自分で作ったからこそ苦労があつてうれしい!

C: 新しいものを生み出すことには達成感がある!



一般的な概念である「苦労=苦手」という意識から問い返して深まりを図る

問い返しは瞬時に対応するからこそその難しさがありますが、問い返しがピタッとはまると、子どもの言葉をもとにして深まりのある授業が可能になります。

## 4. 発問が浮かぶ! けど、気をつけないと...

このほかにも、「発問・問い返し」にはたくさんの方がいますが、紙面の都合上ここまで…

さて、発問づくりに慣れてくると、いろいろな発問が浮かび、どんどん子どもに問いたくなります。しかし、

それは危険! 一見盛り上がったように見えても何を学んだかわからない授業になりかねません。発問を乱発しないこと。ねらいに向かって、子どもの思考に沿ったストーリーを考えることを大切にしたいですね。